

「異端の経済学」の正当性

—シスモンディ『経済学新原理』出版 200 年に因んで—

The Justice of a Heretical Economist, related to the two-hundred anniversary of the publication of *Nouveaux Principes d'économie politique*.

中宮光隆（熊本県立大学（名誉教授））

今年（2019 年）はシスモンディ（Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842）『経済学新原理』（*Nouveaux Principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec population, 2 vols. 1819, 2e éd. augmentée, 1827*）が出版されて 200 年になる。シスモンディ経済学を「過少消費説」あるいは「異端」と特徴付ける見解は、一般的である。本報告では、シスモンディの理論は経済学の歴史的な流れのなかで、「異端」でも謬論でもなく、ひとつの主要な流れの一齣とみるべきであることを明らかにする。報告者はすでにシスモンディ経済学を「過少消費説」と特徴付けることの誤謬を論証し（中宮、1997）、8 年前に開催された本学会全国大会では、彼の経済思想における功利主義の影響を報告した。また、一昨年、彼の経済思想が功利主義ないし効用原理にあることに関して論文で発表した（中宮、2017）。今回の報告は、それらを踏まえて彼の経済学が歴史の中で大きな流れのひとつを形成しており、単に「異端」ではなく、歴史的な流れのひとつの典型とも言うべきものであることを示す。

1803 年に出版された『商業の富』（*De la richesse commercial ou principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce*）が「スミスの祖述」であり、アダム・スミスの経済学を忠実に踏襲した（と少なくとも彼は考えている）理論を展開したシスモンディが、彼自身、『経済学新原理』の序文で、この新たな著作をスミス経済学の「修正」と明言している。いわゆるシスモンディの「転向問題」である。スミス経済学をそのまま継承ないし発展させることが「正当」であるとするならば、『経済学新原理』以降のシスモンディは「異端」との位置づけも成立するかもしれない。しかしながら彼自身は、自分は「異端」とは考えていなかった。彼は、『経済学新原理』はスミス理論の「修正」に過ぎず、否定しているわけではないと考えていた。そしてその修正は経済状況の変化によって当然求められる現状分析の部分の「修正」とともに、それにもかかわらず理論的・本質的にはスミス経済学を継承発展させている（この点の是非はおくとして）、そのような「修正」としてと認識していたのであった。とは言え、この「修正」は、たんに現状分析部分だけに止まらず理論的部分において、経済を生産で

はなく需要の側面から捉えるという、経済学の流れにおけるひとつの典型の一端を担うとともに、経済思想としても注目すべき特徴をシスモンディ経済学に付与することになった。

スミス経済学をとりわけ現状分析の部分で「修正」せざるを得ないとシスモンディが考えた背景のひとつが、1815年の恐慌であることは明白である。また、1827年に出版された『経済学新原理』第2版の序文でも、1825年の恐慌を念頭に、『経済学新原理』初版の理論の正当性を強調している。「修正」は彼にとって当然のことであった。

それだけではない。シスモンディ経済学の背景にある彼の思想からも、恐慌発生というスミスの時代にはなかった経済状況の下で、「修正」は当然なされるべきであった。その思想とは、功利主義あるいは効用の原理である。

シスモンディ恐慌論のひとつの柱は、「欲求」の総量が社会全体で限定されているために生産物が完全に需要されない、という点にある。これがシスモンディ経済学を「過少消費説」と特徴づける根拠にもなっているが、このような解釈はあまりにも皮相である。彼における欲求の限界の課題は、格差（貧富の差）の現実及び論理・思想に結びついていることを見落としてはならない。富者の欲求はその豊かな所得にもかかわらず限られており、その結果、総需要が限定されたものにとどまらざるを得ない。他方、貧者の欲求は大きくても乏しい所得では満たすことができない。社会全体としては貧富の差ゆえに満たされる欲求総量が限定される、すなわち需要不足が不可避となる、という論理である。その解決策は貧富の差の縮小ないし解消、分配の平等である。重要なことは、この論理の思想的背景に功利主義思想があることである。

シスモンディは、ジュネーヴやスコットランドの同時代人たちから大きな影響を受けている。そのひとりにスコットランドの政治家マッキントッシュ（Sir James Mackintosh, 1765-1832）がいる。彼はフランス革命の初期にそれを擁護したが、後に離反した。シスモンディとマッキントッシュは両者の妻が実の姉妹であるので、義兄弟の関係にある。それ以前の時期であるが、ジュネーヴでの革命によってシスモンディ一家がイタリアのペーシャに事実上亡命したとき、シスモンディはむしろ革命に理解を示していた。ナポレオンがパリに戻った百日天下の時期にナポレオンから新憲法起草の依頼を受けたコンスタン（Henri - Benjamin Constant de Rebecque, 1767-1832）¹⁾から、シスモンディはその起草案を示されコメントを書いている。革命への視座が、シスモンディ経済思想の根底に伏在しているように思われる。

ジュネーヴでは18世紀末以降、いわば啓蒙運動ともいえる動きが当時刊行された雑誌の編集たちによって展開された。『ビブリオテーク・ブリタニク』

(*Bibliothèque britannique*) 誌とその編集者や協力者たちである。編集者はピクテ兄弟(Marc-Auguste Pictet, 1752-1825、および Charles Pictet de Rochmont, 1755-1824) と友人のフレデリック=ギヨーム・モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice, 1750-1826) である。彼らの思想は、功利主義であった。1796年に刊行された同誌第1巻第1号序文には「効用の原理 (Le principe d'UTILITÉ)、これはわれわれの不変の羅針盤である」²⁾ と指摘されている。彼らは思想基板に効用原理を据えつつ、イギリスの進んだ生産技術をジュネーヴに取り込み定着させることによってジュネーヴの高揚を図ろうとした。シスモンディはこれらの人々とも交流していた。

これとは別に、同時代に雑誌 *Annales de législation et de jurisprudence* が短期間ではあったが刊行された。この編集者の中にエティエンヌ・デュモン (Pierre Étienne Louis Dumont, 1759-1829) がいたが、シスモンディはこれにも関わっていた。

さらに、シスモンディに影響を与えた人物に、ジュネーヴ人ピエール・プレヴォ (Pierre Prévost, 1751-1839) がいる³⁾。多彩で数奇な人生を送ったプレヴォは、人生の後半はジュネーヴで上記の『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちと共に活動し、同誌に積極的に関与している。

シスモンディはこれら『ビブリオテーク・ブリタニク』の編集者たちやピエール・プレヴォから強い影響を受けている。それは、『経済学新原理』第1編「経済学の対象と起源」第1章「国政学の二重の目的」の冒頭でシスモンディが次のように述べているところに、端的に表現されている。

「国政学は、社会に結合した人間の幸福を目的とするし、しなければならない。国政学は、人間の性質と両立しうる最大の幸福を人間に保証する手段、それと同時に最大多数の個人にこの幸福を分かち手段を追求する。」

マルクスは、リカードウやマルサスほどにはシスモンディを批判していない。マルクスは『経済学批判』(*Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, 1859) の「A商品の分析の史的考察」の中で、古典派経済学はイギリスではウィリアム・ペティに、フランスではボアギルベールに始まり、イギリスではリカードウに、フランスではシスモンディに終わると記し、「批判的」に見る古典派経済学ではあるが、その流れの中にシスモンディを位置づけていることは注目されるべきである。さらに、かつて報告者が指摘したように、マルクスの擬制資本論はシスモンディの「想像的資本」をモデルにしている。マルクスは明言こそしないもののシスモンディ経済学を一部とはいえ取り込んでいるのである。

シスモンディ経済学は、当時の欧州全体の幅広い人的関係と思想上の影響・継承関係の中で位置づけられるべきである。そこには、スミサーリカードウとは異

なる、別の大きな流れが見て取れる。

注)

1) コンスタンは、シスモンディとともに、レマン湖畔コペにあるスタール夫人のサロンに出入りしていた。

2) *Bibliothèque britannique*, t.1, *Litterature*, (1796), pp.6-7.

3) プレヴォは、ルソーが社会や政府の状況の善し悪しの尺度を単に人口の多さに還元していることを批判しているのであるが、そこには二つの論点が表現されている。ひとつはもちろん人口だけが尺度ではないということであるが、それだけではなく、さらに「幸福」が尺度だとしている点である。人口が多ければよいということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。この論理（精神）が、シスモンディ経済学の根底にある。

参考文献

Annales de legislation et de jurisprudence. (1820-1822)

Bibliothèque britannique. (1796-1815)

Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres, et arts. (1990～)

Candolle, A.-P. de (1839), *Notice sur M. Pierre Prévost. Professeur émérite à L'Académie de Genève*. (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève. Avril, 1839).

O'Leary, Patrick (1989), *Sir James Mackintosh: the Whig Cicero*.

Pappe, Hellmut Otto (1963), *Sismondis Weggenossen*.

Prévost, Pierre (1806), QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION, *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31.

Salis, Jean-R. De, *Sismondi 1773-1842*, t. I , *La vie et l'oeuvre d'un cosmopolite philosophe*, および t. II , *Lettres et documents inédits suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie* Genève, 1973. (Réimpression des éditions de Paris, 1932)

Simonde de Sismondi, Jean-Charles-Léonard (1837-38) *Étude sur l'économie politique*, 2 vols.

Mazzei, Umberto (2018), *SISMONDI, PRÉCURSEUR IGNORÉ PAR MARX*. (Traduit de l'anglais.)

- 中宮光隆 (1997) 『シスモンディ経済学研究』(三嶺書房)。
- (2004) 「シスモンディとリカードウの一接点」(熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション— (熊本県立大学総合管理学部創立10周年記念論文集)』) 上巻。
- (2006) 「シスモンディの経済思想とその由来」飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社。
- (2009) 「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号。
- (2010) 「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号。
- (2011a) 「ピエール・プレヴォにおける道德哲学と経済学」『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号。
- (2011b) 「『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ —効用原理と道德哲学—」『アドミニストレーション』第18巻1・2合併号。
- (2012) 「ピエール・プレヴォとシスモンディ —経済思想における功利主知的要素—」『アドミニストレーション』第18巻3・4合併号。
- (2017) 「功利主義思想とシスモンディ経済学 —経済危機回避策の思想基盤—」『関西大学経済論集』「小池渺先生退職記念号」第67巻第3号。